

第 11 回市史講座ミニレポート：平成 28 年 2 月 20 日（土）

堀尾氏の城郭普請 講師：山上雅弘先生（兵庫県立博物館学芸員）



山上雅弘先生は「堀尾氏の城郭普請」という題で報告されました。

まず、堀尾氏の松江城築城について他の外様大名より築城が大幅に遅れたのはなぜかという点、そして、松江城内域写真と絵図を用いて各曲輪など城内の縄張の特徴を取り上げ、完成しなかったとされる場所と、その理由を探るお話をされました。

堀尾氏は、松江城築城について、亀田山周辺および、三之丸・三之丸内（御花畑・御鷹部屋）を含めた広大な地域を

城郭用地として計画し、次に堀尾時代の松江城下を写した『堀尾期松江城下町絵図』に見られるように城郭と城下町の基本プランを完成させたと言われました。

山上先生は、松江城の築城が、関ヶ原合戦後に領地を得た他の大名と異なり、大幅に築城時期が遅れたことを指摘されました。これは、親子による築城地に関する意見の隔たり、忠氏の急逝による堀尾家中の混乱だけでは説明がつかないとされ、他の大名家では、如何なる事態が発生しようとも入国後、できる限り早くに築城を開始していることを述べられました。

それに対し、堀尾家では、慶長 12 年まで築城が伸びたその原因については、現段階で明確な理由を断定しにくいとされつつ、他の外様大名の例として、関ヶ原で西軍の総大将を勤めたため築城地の決定に時間が掛かった毛利家、慶長 7 年の小早川秀秋の死去により美作に入国し、津山に築城を行った森家のような事例をあげられました。しかし、堀尾氏の場合これらとは異なる点で、松江城の築城の遅れを考える必要があるとされ、今後の課題であるとされました。しかし、慶長 14 年に豊臣秀頼の意向で行われたに出雲大社の遷宮に際して、現地の責任者として堀尾吉晴も造営に関わっていることを指摘され、このことが築城開始の遅れに何らかの影響を与えたのではないかと示唆されました。

次に、松江城の縄張りについて、登城道について大手登城道（現在の堀尾吉晴像からの道）、脇虎口門からの道、三之丸から千鳥橋を渡り二之丸に入る道、搦手門にあたる（稻荷橋・中原口）からの道の4箇所を取り上げ城郭としてのその特質を解説され、建造物について櫓は本丸と二之丸周辺に限られますが、腰曲輪、外曲輪（二之丸下ノ段）に未完成の櫓台を有する点を指摘されました。

松江城の縄張りの特徴について、城の玄関にあたる大手は巨大な桁形を備える形に整備しています。松江城は東側を重視した形をとっていること、形式的であるが一般的な形を守っていると評価されました。大手道と三之丸表御門が並立しており、城郭陪を詰め城化が顕著に進行していました。また、城地に丘陵地を選んだこと、虎口の形式についても慶長初期の形を踏襲しているとされました。そして本丸と二之丸部分を広くとったことで御殿施設などの整備に対応したものであるとされています。それに対し、西側の外曲輪・後曲輪は土塁が多用されて、それぞれ一定の防御がなされていることも説明されました。

未完成の部分がありながら、城郭として基本的な防備を供えた城を、他の大名より遅滞した中で完成させた堀尾氏の築城技術は素晴らしいものであり、その他、付随する未完成と見られる櫓、曲輪など随時着工することを基本に置いていたのではまいかと話されました。しかし、それがなされぬまま堀尾氏は消滅してしまいました。

城下町についても江戸時代を通しての完成度の高いプランで整備計画をしており、それがその後の京極・松平氏と引き継がれて松江城下ができているとされ、堀尾時代にも限られた時間を有効に用いて基本的な整備したと評価されました。

山上先生は、堀尾氏の松江城築城について、この時期の一般的な縄張りを用いており、城下町を含め築城と同時に進めたこと、城下町のプランは江戸時代を通じて変更がない優れたプランであったこと、築城時期が遅かったため、城郭の北・西側は簡略化されているが、一定の防備を備えたすぐれた城下・城下町であると評価されました。そして今の状態こそが歴史的な遺産であると強調されました。